

津山に伝わる樺太地図  
—宇田川榕菴蔵張込帖所載カラフト図を事例に—

岡山大学大学院教育学研究科教育科学専攻 2020 年度 PBL  
「つやま洋学プロジェクト 2 世」 Hoang Ngoc Bich Tran

## I. 動画教材を使うにあたって

### 1. 教材のねらい

本教材では、津山洋学資料館に保管されている「宇田川榕菴蔵張込帖所載カラフト図」を歴史的・地理的な視点から考えさせることを通して、歴史地図の見方・考え方を身に付け、江戸幕府の鎖国下の日露関係を理解させることを目指している。

### 2. 指導観

グローバル社会を主体的に生きる上で必要な国際感覚を養いつつ、教育地域創生に関する課題を同時に解決するために、自分たちの住む地域の歴史をグローバルな文脈で理解できることが目指されている。津山藩の洋学者が江戸時代、蘭学の興隆に大きな役割を果たしていた点を踏まえると、上記 2 つの要素を結びつけて学習するにあたって、津山の洋学は格好の題材を提示してくれよう。

間宮林蔵は樺太を探検し、唯一世界地図に名前を残した日本人である。ロシアの動きを警戒した幕府は 1808 年（文化 5 年）に樺太を探検するよう彼に命じた。その翌年に彼は樺太を探検し、そこが半島ではなく島であることを確認した。その結果、樺太とユーラシア大陸に挟まれたところが「間宮海峡」と名付けられている。この時期に作成された樺太の地図の 1 枚が津山に伝わっており、これを用いたテーマ学習は、歴史地図をどのように見るかということに加え、幕末の国際関係を理解させる上でも効果的である。

### 3. 指導時のポイント・留意点

教材動画では「宇田川榕菴蔵張込帖所載カラフト図」を実際に見せ、現在の樺太の地図と比較しながらその特徴について考えてもらえるような構成にしている。この動画は単に地域歴史資料を見るだけでなく、実際に見た人に作業してもらおうという点で特徴的であると言えよう。

30

### 4. 動画教材視聴時のポイント

動画教材は以下の 4 つのシーンで構成されている。

#### (1) 樺太の地図に関して前提とする情報の提供と問題設定

①この地図にはどのような特徴があるか？ ②なぜその地図がつけられたのか？

(2) 問題①の答えを導くための説明：樺太の地図を詳しく見せながら紹介する

(3) 問題②の答えを導くための説明：北方調査・探検の必要が生じた歴史的背景を紹介する

(4) 樺太の地図と津山洋学者（宇田川榕菴）とのつながり

### 5. 取扱い教科等

- 中学校 【社会科】 【歴史的分野】

(イ) 江戸幕府の成立と対外関係

江戸幕府の成立と大名統制、身分制と農村の様子、鎖国などの幕府の対外政策と対外関係などを基に幕府と藩による支配が確立したことを理解すること。

(内容の取扱い)

(3) のアの(イ)の「鎖国などの幕府の対外政策と対外関係」については、オランダ、中国との交易のほか、朝鮮との交流や琉球の役割、北方との交易をしていたアイヌについて取り扱うようにすること。その際、アイヌの文化についても触れること。「幕府と藩による支配」については、その支配の下に大きな戦乱のない時期を迎えたことなどに気付かせること。

文部科学省『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 社会編』（2017）、106 頁より

● 中学校 【社会科】 【地理的分野】

A 世界と日本の地域構成

(1) 地域構成

次の①と②の地域構成を取り上げ、位置や分布などに着目して、課題を追究したり解決したりする活動を通して、以下のア及びイの事項を身につけることができるよう指導する。

① 世界の地域構成 ② 日本の地域構成

ア 次のような知識を身につけること。

(ア) 緯度と経度、大陸と海洋の分布、主な国々の名称と位置などを基に、世界の地域構成を大観し理解すること。

(イ) 我が国の国土の位置、世界各地との時差、了解の範囲や変化とその特色などを基に、日本の地域構成を大観し理解すること。

イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身につけること。

(ア) 世界の地域構成の特色を、大陸と海洋の分布や主な国の位置、緯度や経度などに着目して多角的・多角的に考察し、表現すること。

(イ) 日本の地域構成の特色を、周辺の海洋の広がりや国土を構成する島々の位置などに着目して多面的・多角的に考察し、表現すること。

文部科学省『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 社会編』（2017）、37-38 頁より

- 30 指導要領解説によれば、国名を覚えることに負担を感じる生徒に配慮して授業が展開できるように「例えば、国名を単に覚えるだけの学習にならないよう、索引を使って国の位置を探するなど教科用図書「地図」（中略）を活用した学習活動を行ったり、人物名、山や川などの地形名などに由来する国名に着目したりするなど」（同 40 頁）の工夫が必要であるとされている。

● 高校【地理歴史 日本史探究】

(3) 近世の国家・社会の展開と画期（歴史の解釈、説明、論述）

諸資料を活用し、(2) で表現した仮説を踏まえ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、次の事項を身につけることができるよう始動する。

ア 次のような知識を身につけること。

(ア) 法や制度による支配秩序の形成と身分制、貿易の統制と対外関係、技術の向上と開発の進展、学問・文化の発展などを基に、幕藩体制の確立、近世の社会と文化の特色を理解すること。

(4) 産業の発達、飢饉や一揆の発生、幕府政治の動揺と諸藩の動向、学問・思想の展開、庶民の生活と文化などを基に、幕藩体制の変容、近世の庶民の生活と文化の特色、近代化の基盤の形成を理解すること。

イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。

(7) 織豊政権との類似と相違、アジアの国際情勢の変化、交通・流通の発達、歳入の発達と文化の担い手との関係などに着目して、主題を設定し、近世の国家・社会の展開について、次章の意味や意義、関係性などを多面的・多角的に考察し、歴史に関わる諸事象の解釈や歴史の画期などを根拠を示して表現すること。

(4) 社会・経済の仕組みの変化、幕府や諸藩の制作の変化、国際情勢の変化と影響、政治・経済と文化との関係などに着目して、主題を設定し、近世の国家・社会の変容について、事象の意味や意義、関係性などを多面的・多角的に考察し、歴史に関わる諸事象の解釈や歴史の画期などを根拠を示して表現すること。

文部科学省『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説 地理歴史編』（2018）、234 頁より

指導要領解説によれば「幕府政治の動揺と諸藩の動向については、国際情勢の変化と影響などに着目して、東アジアにおける国際情勢の変化が日本にもたらした状況などについて、推移や展開を考察するための課題（問い）を設定し、ロシアをはじめとする欧州諸国のアジア進出と幕府・諸藩の対応を確認するなどの学習が考えられる」とある（同 239 頁）。また、学習に当たっては「デジタル化された資料や、地域の遺構や遺物、歴史的な地形、地割や街並みの特徴などを積極的に活用し、具体的に学習できるよう工夫するとともに、歴史資料や遺構の保存・保全などの努力が図られていることに気づくようにする」ことも指摘されている（同 232 頁）。

## II.読み上げ原稿と補足解説

この動画は、社会・歴史の授業で活用できるオンライン教材を目指して、岡山大学大学院教育学研究科教育科学専攻 2020 年度 PBL 活動の一環で制作されたものです。この動画では、歴史地図の社会科授業への活用の一例として、津山に伝わる樺太地図、宇田川榕菴張込帖所載カラフト図を事例に見ていく。

### 【イントロダクション／問題設定】

30

皆さんは、樺太がどこにあるか知っていますか？樺太、あるいは「サハリン」ともいいますが、宗谷海峡をはさんで北海道の北にあるロシアの島です。その特徴は南北に細長く、面積は北海道よりちょっと小さい 76,400 km<sup>2</sup>になります。

この樺太をめぐっては、江戸時代、今のような地図がまだなかった頃は、そこが島なのか、それとも半島なのかわかりませんでした。そこで江戸幕府は 1808 年（文化 5 年）「間宮林蔵」<sup>1)</sup>という人物に樺太を探検するよう命じました。

そこで林蔵はその翌年に樺太を探検し、そこが島であることを証明しました。樺太の北西部、大陸と樺太を隔てる海峡が「間宮海峡」と呼ばれているのは、そのためです。

間宮林蔵の探検結果を踏まえて、江戸時代の後期に樺太の地図が作成されました<sup>2)</sup>。この動画では、津山藩（現在の岡山県津山市一带）の洋学者<sup>3)</sup>である宇田川榕菴が持っていたカラフト図<sup>4)</sup>を取り上げます。「この地図には一体どのような特徴があるのでしょうか？」そして「なぜその地図がつけられたのでしょうか？」今の地図や当時の歴史を見ながらこの問題の答えを見つけいきましょう。

### 【補足解説】

1) 間宮林蔵(1760-1844)は幕府の役人として、探検家・測量家の仕事をしていた。林蔵は幼い頃にも才能が認められ、その後、地理学者の村上島之允（むらかみしまのじょう）や伊能忠敬に測量術を教わった。林蔵は伊能忠敬の未測量地域の海岸を実測した。それは忠敬の「大日本沿海輿地全図」に生かされたと言われている。以下は間宮林蔵が樺太探検を命じられるまでの年表である（高橋 2008）。

1780年 常陸国筑波郡上平柳村（現在の伊奈町上平柳）の農家に生まれる

1795年 小具川工事への提言で見だされ、江戸に出ることに。名を倫宗と改め、測量家・村上島之允に師事する

1799年 幕府から普請役雇に任命された村上島之允の従者として、蝦夷地（北海道）へ

1800年 函館で伊能忠敬と会い、師弟関係を結ぶ。普請役雇となる

1803年 東蝦夷地、南千島の測量に従事する

1806年 エトロフ島に渡り、沿岸実測

1807年 ロシア軍艦にエトロ島の要地シャナを襲撃され、退却を余儀なくされる。

2) 林蔵は 1809（文化 6）年 11 月、無事に松前に帰着したが、すぐに江戸に出ようとしなかった。彼には、その前に報告書を作成するという大きな仕事が残されていた。林蔵は探検中の記録にたよりに、カラフト西岸から大陸（東韃）デレンに至る「北蝦夷島地図」（大図 7 枚。原本は内閣文庫所蔵）に専念し、著述の「北蝦夷地部」（10 巻。献上本「北夷分界余話」の原本）や「東韃紀行」（3 巻、献上本「東韃地方紀行」の原本）は林蔵の口述によって村上貞助が筆記し、随所に絵図を挿入したと言われる。

3) 江戸時代に日本にやってきた西洋の学術・文化・技術を研究した人たちのことを「洋学者」という。江戸時代後期には、オランダ語を通じてそれがなされていたので「蘭学者」と呼ばれていたが、開国に伴って英語やフランス語なども日本にやってきて研究されるようになったため、広く「洋学者」と呼ばれるようになった。江戸時代、現在の岡山県津山市一帯に津山藩（藩祖は越前松平家分家の松平信宣）があった。江戸時代後期に入ると、宇田川家や箕作家をはじめ、日本の近代化に貢献した洋学者を幾人も輩出している。

30 4) 「宇田川榕菴蔵張込帖」所載カラフト図は今まで知られていた、間宮林蔵の第 2 探検報告図に始まる一連の同形図に新たな 1 図を加えるものとして高く評価されている。その理由は欠損部分がなく、大陸（東韃地方）も含む完全な形であり、村上貞助の自筆のためである。

### 【地図紹介】

それでは、こちらをご覧ください。これが、宇田川榕菴が持っていたカラフト図であり、現在は津山洋学資料館に保管されています。榕菴の「張込帖」今でいうスクラップブックのなかにこの地図が収められていました。地図が大きくて張込帖に入りきらなかったのでしょうか。このように、中央で 2 つに切断されています。ちなみに、この地図を描いたのは「村上貞助」という人物で、備中松山（現在の岡山県高梁市）の出身で、松前奉行同心を勤め、間宮林蔵の著述や地図作成に協力しました。まずは 1 枚目を見てみましょう。こちらは樺太の南半分になります。地図を見る前に、ここに「凡例」があるので、確認してみましょう。ここに文化 8 年（1811 年）に作成されたとありますね。色分けがされていて、緑色が蝦夷部落であり、樺太アイヌという民族の居住地を示していると考えられます

5). 紅色が異俗夷部落であり、ニヴフとウィルタという民族の住居地を示していると考えられます  
6). 茶色が減潮沙地とされており、これは干潮になったときに現れる浅瀬の泥地であると考えられます<sup>7)</sup>。そして、点線のところは未見分地とされています。ですので、例えば（地図を指しながら）この緑色の部分が蝦夷部落、ここが異俗夷部落となっているのがわかります。つぎに、こちらを見てみましょう。現在のトマリという都市の名前がここに記載されていますね。ちなみにトマリでは現在、日本統治時代に日本人が建造した神社跡を文化遺産として保存するとともに、住民のためのレクリエーションエリアや観光スポットが整備されています。

次は2枚目です。こちらは樺太の北半分になります。この部分を拡大してみましょう。（地図を指しながら）この紅色が異俗夷部落、ここが減潮沙地となっているのがわかりますね。そしてこの拡大したところが、間宮林蔵が探検して発見した「間宮海峡」になります。わかりますか？

では、この2つの地図を合体させて、1枚の地図にしてみましょう。一体どのような特徴があるでしょうか？参考までに現在の樺太の地図と見比べてみましょう。

(答え)「歴史地図」と「現代の地図」を比較すると、緯線の数が違うことに気づきます。ですので、島の長さについては当時の測量技術の問題もあって、必ずしも正確なものとはなっていませんね<sup>8)</sup>。あとは、樺太の東側の海岸線が随分簡略に描かれていることにも気づきます。ところが、東側の海岸線とは対照的に、島の西側の海岸線、特に間宮海峡のところは非常に正確に描かれていて、現代の地図と見比べてもほとんど変わりありません。ここから、間宮林蔵の関心が島の西側、特に間宮海峡にあったことがわかりますね。つまり、林蔵の探検の目的は、樺太の地図の作成というよりもむしろ、ここが島なのかどうか、それを突き止めることにあったといえるでしょう。

### 【補足解説】

5) 林蔵が樺太探検を行った頃、サハリン南部はアイヌが暮らす土地であった。2度の探検中、林蔵はたくさんのサハリンアイヌと出会い、案内してもらいながら旅を続けた。『北夷分界余話』には彼らの暮らしぶりが克明に記録されている。

6) 東海岸の前進を阻まれてタライカ湖に戻ってきた林蔵は近くのシー川筋で2日間滞在してウィルタという民族の人々を観察した。東岸の北上を断念し引き返すことになった林蔵が、ここで村を調査し、ウィルタ社会のことを記録していた。また、林蔵はリヨナイから北緯 50 度線を越えポロコタンへと進み、6月20日、ニヴフの集落があるノテトに達した。ここで、林蔵はニヴフという民族と出会って、ニヴフのことについても記録していた。

7) 林蔵が東岸の北進に失敗して伝十郎に合流すべく西岸へと引き返している間に伝十郎はすでに北緯 52 度に近いラッカに到達していた。伝十郎はそこで浅瀬の泥地で船でも徒歩でも前進は困難だという。「宇田川榕菴蔵張込帖」所載カラフト図の凡例に示される「減潮沙地」は伝十郎が語った特徴と一致すると考えられる。また、伝十郎は間宮林蔵と再会したときにそこに立つと大陸の陸地は間近に迫り、アムール川河口も眺められ、明らかにサハリンが大陸と離れる島だったと知らせた。

8) 間宮林蔵は探検でどのような測量法や測量道具を使ったか、高橋景保の記述（「北夷考証」文化 6 年）から見ていこう。この記述から、探検当時、林蔵が緯度の正確な測定法を身につけていなかったことが分かる。測量法は主に、自分で歩いて図り、アイヌ人の伝説に従い、測器をもって星度を測る

ことである。そして、携行した測定器具は方位を測る「わんか羅針（らしん）」のみである。つまり、残念ながら、当時の樺太測量は人力も少ないし、測量技術も稚拙だし、測量道具も不足していた。

### 【なぜ樺太の地図作られたのか？】

では、なぜこの地図が作られたのでしょうか。

18世紀になるとロシアは東へ、東へと勢力を拡大し、北海道（蝦夷地）の近辺にも出沒するようになりました。こうしたロシアの脅威に備えて、江戸幕府は、当時幕府にとって未知の土地であった蝦夷地を調査する必要が生じ、間宮林蔵にそれを命じました。林蔵は調査中にロシアの軍艦に砲撃されたこともあり、異国の脅威を確認できました<sup>9)</sup>。

その後、林蔵は幕府から樺太探検を命じられました<sup>10)</sup>。ロシアは一体どこまで迫っているのか、幕府は蝦夷地の北にある樺太を調べ、そこが島なのか、それとも半島なのか、ロシアとの国境を確認するためにも、これを明らかにする必要があったのです。それは当時の日本の領土問題にとっても重要なことでした。かくして、林蔵は2回の探検を通じて樺太が大陸と繋がっていない「島」であることを確認しました<sup>11)</sup>。ちなみに、ヨーロッパの探検家たちも樺太の調査をしていましたが、そこが島であることまでは突き止めていませんでした。したがって、林蔵は海峡を通行突破した最初の人物であり、その功績を記念して、大陸と樺太の間にある海峡は「間宮海峡」と呼ばれるようになったのです<sup>12)</sup>。

(答え)なぜ、このような樺太の地図が作られたのでしょうか？ それはロシアの南下に備えるために、幕府が樺太に関する情報を必要としていたからなのですね。おわかりいただけでしょうか？

その後、樺太千島交換条約、ポーツマス条約を経て、太平洋戦争末期にソ連が占領し、現在に至っています<sup>13)</sup>。

### 【補足解説】

9) ロシア人南下の警報がしきりにきたり、またロシアの野心に関する警告がもたらされるにおよんで、林子平以下、憂国の志士の活動となり、人々は初めて北方問題の重大性を痛感するにいたった。工籐平助は天明のはじめ『赤蝦夷風説考』2巻を著わして、ロシア人の南下を説き、南辺の防備と、ロシアとの貿易の必要を論じたが、林子平は1786（天明6）年に『三国通覧図説』を上梓して、人々にロシアの野心を警告し、ロシアに先んじて蝦夷地を経営させよと力説した。

30 これまで、蝦夷地は松前藩の私領としていっさいその経営に任されていたが、こうした情勢に当面し、その地の防衛と開拓が刻下の急務になるに及んで、幕府はそうした軍事的・経済的仕事の準備として、北海度・千島・カラフトの調査を行う必要を感じ、1785（天明5）年以來、数回にわたり、これらの地に調査隊を派遣した。1799年に林蔵は幕府から普請役雇に任命された村上島之允の従者として、蝦夷地（北海道）へ渡った。1803年、林蔵は東蝦夷地、南千島の測量に従事する。1806年、エトロフ島に渡り、沿岸実測した。1807年、ロシア軍艦にエトロフ島の要地シャナを襲撃され、退却を余儀なくされる。

10) 幕府が1785（天明5）年にカラフトの調査を始めてから、調査員の派遣はすでに3回に及んだが、なかなか奥地の正確な状況を知ることが出来なかった。ロシアの南下に備えて、カラフト防衛の計画を立てるためには、その奥地の地理を明確にすることが急務であった。それで、幕府は蝦夷地全部の直轄を決定した1807（文化4）年のはじめ、第4回のカラフト探検を計画した。当時、箱館奉行はすでに最上徳内や高橋次太夫といった経験と実績のある二人をサハリン島へ派遣する予定していた。と

ころが、エトロフ島やサハリン島をロシアに襲撃され、偶然エトロフ島に居合わせていた林蔵も退却を強いられた。幕府はロシアへの派兵をやめ、敵対心を抱かれては困るアイヌにも懐柔策を選んだ。最上・高橋といった大探検家の大部隊では刺激が強すぎる。身分が低いものを、と再度人選が行われた。選ばれたのは松田伝十郎と間宮林蔵。松前奉行調役下役元締の伝十郎は 40 歳。蝦夷地行政で手腕を発揮していた。29 歳の林蔵は同奉行の雇で、伝十郎の従者と言う立場であった。

11) 第 1 回探検：1808（文化 5）年 4 月 13 日、松田伝十郎に従ってソウヤ（本蝦夷地＝北海道北端）出発、同日カラフト・シラヌシ（カラフト南端）へ渡海。同年 6 月 18 日シラヌシへ帰着。同 20 日伝十郎と共にソウヤへ帰還。この間林蔵は、東海岸はタライカ湖（北緯 49 度 20 分辺り）を経てシレトコ（北シレトコ岬。その先端は北緯 48 度 40 分辺り）に達す。西海岸はラッカ（スメレンクル語の地名。ナッコのこと。ラッカ岬、北緯 51 度 53 分辺り）まで到着、ここでカラフトが大陸と海を隔てる島であることを確認した。従って、この探検でも、東岸はシレトコから北、西岸はラッカから北は、当時の日本人には未知の土地として残された。

第 2 探検：1808（文化 5）年 7 月 3 日、林蔵は単身でソウヤを出発、その後シラヌシ着。1809（文化 6）年 9 月 15 日、シラヌシへ帰着。同 28 日ソウヤへ帰還。この間、西海岸は、第 1 回探検で達したラッカを越えてきたに進み、逆に海峡を通過して、左に大河（渾沌江＝黒竜江）の河口を見、オニオー（北緯 53 度 10 分）にまで達した。オニオーは樺太西岸では北端に近く、現在はルポロボと呼ばれている。林蔵がオニオーに着いたのは 1809（文化 6）年 5 月 12 日であった。彼はここから彼に与えられた使命を果たすため、あらゆる手段を使ってカラフトの北端から東岸へ出ようと試みたが、それは実現しなかった。この第 2 回の探検でも、林蔵の努力空しく、カラフトの東岸、シレトコ（北シレトコ岬）以北は依然として未踏のまま残された。

12) 1804（文化元）年、ロシア使節レザノフを長崎に送ったナデジュダ号船長クルーゼンシュテルンは、1806（文化 3）年にカラフト東岸を調査しながら北上し、最北端に達し、その岬をエリザベットと命名し、その位置を北緯 54 度 24 分 30 秒、西経（グリニッチより西へ）217 度 13 分 30 秒と計測していた。更に、彼は北方からカラフトと大陸の間を南下したが、1797（寛政 9）年にイギリス人探検家ブロートンがタタール湾を南から北へ進入して、大陸とカラフトの間に海峡を認め得なかったのと同様に、通過可能な水路は無いと判断して引き返した。西欧の探検家達が確認できなかった海峡を林蔵が通航突破し、それを事実として地図上に示したのは、「宇田川榕菴蔵張込帖」所載カラフト図が世界で初めてであった。間宮林蔵の功績をシーボルトがたたえ、世界地図上に海峡名として命名したのである。

13) この間の歴史を年表にまとめると次の通りである。

1875 年 樺太千島交換条約：千島列島（この条約で列举されたシュムシュ島からウルップ島までの 18 島）が日本領になる代わりに、ロシアに対して樺太全島を放棄。

1905 年 ポーツマス条約：日露戦争後、日本は樺太（サハリン）の北緯 50 度以南の部分の譲り受けた。

1951 年 サンフランシスコ平和条約：日本はポーツマス条約で獲得した樺太の一部と千島列島に対するすべての権利を放棄。ただ、そもそも北方 4 島は千島列島に含まれない。また、ソ連はこの条約に署名しておらず、同契約上の権利を主張できない。

### 【なぜそのような貴重な地図を榕菴が持っていたのか？】

このように、樺太の地図は国防が絡んだ非常に重要な情報であり、そのため秘密にされなければならない情報でもありました。ところが、不思議なことに樺太の地図の1つを津山藩の洋学者である宇田川榕菴が所持していたのです。

さて、この宇田川榕菴とは一体どのような人物なのでしょう。

榕菴は義父の宇田川玄真に協力して、オランダ語の書物を翻訳して西洋の薬学書である『和蘭薬鏡』や『遠西医方名物考』を出版しました。さらに彼は医学や薬学だけではなく、植物学にも関心を持ち、オランダ語の書物を翻訳して日本で初めて本格的な植物学書『植学啓原』を刊行しました。

そんな榕菴がなぜ樺太の地図を持っていたのでしょうか？まだ不明な点が多いのですが、次のような説があります。

1つ目は、宇田川榕菴の義父玄真が幕府の天文方で蛮書和解御用という翻訳業務を勤めていて、多くの洋学者と交流があり、その縁で受け継いだのではないかと。

2つ目は、「シーボルト事件」のとき、オランダ商館医シーボルトに禁制品「大日本沿海輿地全図」を渡したことで捕まった高橋景保が、蛮書和解御用で一緒だった宇田川父子のところに渡したのではないかと<sup>14)</sup>。

3つ目は、シーボルトは植物学を通じて榕菴と交流を持つようになり、「シーボルト事件」のときに、最上徳内からもらった樺太図を榕菴に託したのではないかと<sup>15)</sup>。

このように諸説ありますが、真相はわかりません。皆さんはどう思いますか？

### 【補足解説】

14) シーボルト事件：長崎出島のオランダ商館に医官シーボルトが来航した。日本に関する総合的な研究が内々の使命として与えられていた彼にとって、北海道の以北の地理は大きな関心事の一つであった。サハリンは島なのか、半島なのか、欧州各国から探検家が挑んだが、未だに様子がつかめなかった。ところが、シーボルトは間宮林蔵がすでに踏査を成功させていることを聞き知った。しかも、地図まで完成させているという。1826（文政 9）年、シーボルトは江戸参府のために、上京すると、書物奉行兼天文方の高橋作左衛門景保と会った。景保は江戸城の中央にあった紅葉山文庫を管理していた。そこは幕府に献上された林蔵のカラフト探検記も保管されていた。樺太東岸の資料を求めていた景保にシーボルトがクルーゼンシュテルンの『世界周航記』などを贈り、その代わりに、景保が伊能忠敬の『大日本沿海輿地全図』の縮図をシーボルトに贈った。この縮図をシーボルトが国外に持ち出そうとした。1828（文政 11）年、オランダ商館付の医師であるシーボルトが帰国する直前、所持品の中に国外に持ち出すことが禁じられていた「大日本沿海輿地全図」などが見つかり、それを贈った幕府天文方・書物奉行の高橋景保ほか十数名が処分され、景保は獄死した。シーボルトは 1829（文政 12）年に国外追放の上、再渡航禁止の処分を受けた。

15) シーボルトと最上徳内：1826（文政 9）年、長崎から江戸に来たオランダ商館長付のドイツ人医師シーボルトと出会い、歳の離れたシーボルトと意気投合します。徳内は数学問題やアイヌ民族などについて話し合い、また、蝦夷北方図とカラフトの地図などをシーボルトに貸し与えたほか、アイヌ語辞典の共同編纂も行いました。

シーボルトと宇田川榕菴：シーボルトは大学で医学を修めましたが、植物学や博物学への関心も深かったという。後にオランダの軍医となってジャカルタに赴き、そこからさらに日本へ赴任することが決まった。シーボルト来日の前年、『菩多尼訶経（ボタニカきょう）』という植物学書を刊行したば



かりの榕菴は、研究への意気込みにあふれていた。シーボルトからの申し出は、榕菴にとって願ってもないことだったのである。自作の植物標本や写生画を送り、植物学について教えてほしいと頼んでいる。シーボルトも榕菴の願いに応じて植物学書を貸したり、珍しい薬を送ったりと、文通はしばらく続けられた。

二人がようやく出会えたのは1826（文政9）年、シーボルトが将軍に拝謁するオランダ商館長に随行して江戸に来たときであった。榕菴は到着を待ちかねて、弟子を品川まで出迎えに向かわせている。そしてシーボルトの江戸滞在中は、宿所となった長崎屋に何度も通って互いに本を見せたり、植物標本を贈ったりと親密に交流をした。榕菴の標本の出来栄えに感激したシーボルトは、長崎へ戻るときに「我が好学の友へ」との献辞を記した博物学書や植物学書、さらに顕微鏡などを贈ったのであった。

### 【おわりに】

この動画で使用した資料・参考文献は次の通りです。以上、「宇田川榕菴蔵張込帖」に収められた樺太図を地歴的、歴史的な視点から見てきましたが、いかがでしたか？今回は樺太図に注目しましたが、榕菴のスクラップブック「宇田川榕菴蔵張込帖」には他にも手紙から、植物図、大砲図まで色々なものが収められていて、彼の関心の幅が広がったことが窺えます。彼の数多くの業績と併せて、その点についてはぜひ津山洋学資料館に来て確認してみてください。

## III.モデル指導案

### 1. 本時の目的

津山洋学資料館で保管されている「宇田川榕菴蔵張込帖所載カラフト図」を歴史的・地理的な視点から考えさせることを通して、歴史地図の見方・考え方を身に付け、江戸幕府の鎖国下の日露関係を理解させることを目指している。

### 2. 本時の展開

過程	教師の発問・提示	学習活動	資料・他の注意事項
導入 第1時	○カラフトはどこにあるか確認する。 ○カラフトについて説明する。  ○カラフトを探検し、作成に関わった間宮林蔵がどのような人物かを調べて、簡単にまとめる。	T:資料①の提示 T:発問する T:資料②の提示  T:発問する T:資料②の提示 P:ノートにまとめる P:発表する	①現在の世界地図  ②教材動画【イントロダクション・問題設定】 ②教材動画【イントロダクション・問題設定】 教科書

問題把握・考え合う 第2・3時	○間宮林蔵の探検報告のもとに作られた「宇田川榕菴蔵張込帖所載カラフト図」はどのような特徴があるか？	T:発問する T:資料③の指示	③教材動画【地図紹介】
	学習課題①：「宇田川榕菴蔵張込帖所載カラフト図」はどのような特徴があるか？		
	○感じたこと、考えたことをグループで話し合っ、グループごとに発表しよう。  ○「宇田川榕菴蔵張込帖所載カラフト図」と現在のカラフト地図を見比べよう。何か気が付いたことがあるのか。 ○感じたこと、考えたことをグループで話し合っ、グループごとに発表しよう。	T:指示する P:資料を使って調べる P:ノートにまとめる P:話し合う P:発表する  T:発問する T:資料③の指示 P:ノートにまとめる T:指示する P:資料を使って調べる P:話し合う T:指示する P:発表する	③教材動画【地図紹介】 *答えを見せないように注意する *動画を止めて考えたり、話し合ったりする時間を設ける
学習課題②：東側の海岸線とは対照的に、島の西側の海岸線、特に間宮海峡のところは非常に正確に描かれている。間宮林蔵の関心が島の西側、特に間宮海峡にあったのはなぜか。			
調べる・考え合う 第4時	○カラフトの地図が作られた背景を調べよう。 ○調べたこと、考えたことをグループで話し合っ、グループごとに発表しよう。	T:指示する T:資料④提示 P:資料を使って調べる  T:指示する P:まとめる P:話し合う P:発表する	教科書 ④動画【なぜ樺太の地図作られたのか？】 *動画を止めて、考えたり、話し合ったりする時間を設ける *答えを見せないように注意する
見学 第5時	○樺太の地図は国防が絡んだ非常に重要な情報であり、秘密にされなければならない情報	T:発問する T:資料⑤の提示	*津山洋学資料館見学 ⑤動画【なぜそのような貴重な地図を榕菴が持っていたのか？】

	<p>でもあったが、樺太の地図の1つを津山藩の洋学者である宇田川榕菴が所持していたのです。この宇田川榕菴とはどのような人物なのか。なぜ榕菴がこの地図を所持していたか。</p> <p>○「宇田川榕菴蔵張込帖所載カラフト図」もあわせて、榕菴のことを津山洋学資料館で見学しよう。</p>	<p>T:指示する P:見学する P:ノートにまとめる</p>	
<p>まとめ 第6時</p>	<p>○これまでの調べたこと・考えたことを基に、グループで話し合い、「宇田川榕菴蔵張込帖所載カラフト図」のストーリー（幕府の要請が出るときから榕菴が所持したまで）を漫画にまとめて、発表しよう。</p>	<p>T:指示する P:話し合う P:漫画を描く P:発表する</p>	<p>漫画のワークシート</p>

#### IV.参考文献

- ・ 五十嵐辰博 (2019)「中学校社会科授業におけるデジタル教材活用の視点—デジタル教科書のコンテンツ分析を通して—」『千葉大学教育学部附属中学校研究紀要』49, 21-29.
- ・ 池野範男・竹中伸夫・田中伸・二階堂年恵・川上秀和 (2004)「小学校社会科における見方・考え方の育成方略—単元『地図とはどのようなものでしょうか？地図について考えてみよう！』を事例として—」『広島大学大学院教育学研究科紀要』2(53), 79-88.
- ・ 石田清彦 (2005)「人物教材を通して歴史的思考力を育成する歴史学習」『社会科教育論叢』44, 42-47.
- ・ M.S.ヴィソコーラ (2000)『サハリンの歴史—サハリンとクリル諸島の先史から現在まで—』, 北海道撮影者.
- ・ 大田満 (2020)『小学校の多文化歴史教育—授業構成とカリキュラム開発—』明石書店.
- ・ 大野延胤 (2000)「宇田川榕菴蔵張込帖所載のカラフト図について」『一滴』8, 1-23.
- ・ 高橋大輔 (2008)『間宮林蔵・探検家一代—海峡発見と北方民族—』中公新書ラクレ.
- ・ 津山洋学資料館「榕菴とシーボルト」「洋学博覧漫筆」vol. 14 <http://www.tsuyama-yougaku.jp/Vol14.html> (2021年2月11日確認)
- ・ 洞富雄 (1986)『間宮林蔵』吉川弘文館.